

詩とば

阿部 公彦

人の死に直面すると、私たちは口をつぐみたくなる。迂闊にしゃべれば負けるから。日常の言葉では、死に太刀打ちできないから。しかし、詩の強みはそこにある。二〇一一年の災害時、金子みすずや和合亮一の作品に注目が集まった。死の威力を前にして情緒の底がぬけてしまつたような畏怖を覚えるとき、私たちは詩の強さを再発見する。

そもそも詩は鎮魂のためのものだと信じている。ただ、死の持つ「崇高」との向き合い方はさまざまだ。カニエ・ナハ『IC』(ポプルス)は、短歌風のタイトルに詩の本文がつくところ、趣向で、たとえは「どうぶつがみなしずんでるぬきうみできうい」(とり)の「がおおきいこわい」という題で、「眠っているひとのかたわらに一日の大半を過ごす睡眠となる／夢と夢とが交錯するいは濃縮してしまつのか私のでない夢は……」と続く。短詩形の題に対し、本編の自由詩はその派生とも、批評とも見える。短

死に負けぬ強さ

詩に凝縮された「詩＝死」の重さから、解放されるかを模索する作品だ。四元康祐の「奥の細道・前立腺」(『群像』二月号)は癌を告知され射精不全に直面した主人公の治療体験を書く散文作品で、一見、コメディ風だが、ときおり挿入される詩篇や断章がそのした諧謔を裏切る予兆となる。道化ぶりをうきまがうって、遠い無限世界の冷たさが迫る。

水出みどり『夜更けわたしはわたしのなかを降りていく』(思潮社)にはほんの一節がある。「死ぬということは、残されたものになか／＼声を置いてゆくと／＼それは生き生きした表情を持って魅／＼二度と失われることはない」「(とつぎの声)」。この詩集全体がまなこでこのように書かれているのをおもしい。シンプルで儚い風情なので、言葉に生命力を感じる作品だ。十田隼子『銘度利加』(思潮社)は、粘り気のある言葉の連鎖から古代的とも言える幻想風景を漂い出す。「祝祭は無言でほじまる／茂みのそこかしこに揺れる丸いつぼみが／ぼんやり赤く発光しながら／ひとつ、またひとつと目を覚ます」「(赤い花)」。詩が「死の祭」を司るひととこぎだ。

(東大准教授)